英詩に見る子供の姿（三）

松原至大

赤ちやんメイ（ベネット）

七月の桃のように
やわらかなほほ。
うす色のけしの花を思わせる
ぬれて赤いくちびる。
絶えず新しい驚きに輝く
つぶらな大きい眼。
いつもいつぱいの
くもりない喜び。
いつも押し寄せている
憂いと樂しい笑いと泣き聲と
心からの歡聲と涙眼と。
この光と影とは風に拂われる
秋の落穂よりも早く移り變り。
しきりなしに浮ぶ
新しい小さな思い。

手足を絶えず動かしたり。
腕と脚をさし伸べたり、
そり返つたりこわがつたり、
手で握ろうとしたり——
引つぱろうとしたり、
足指を皆動かして
まつわる足、
けり上げたり、
まつすぐに伸したり、
それはどれも
母親の新しい驚き。
この世の中にあるものは
何んでも手にとろうとして、
それを見ては驚きを感ずる。
笑ひながらのしかかりに抗議する、
しかもその愛らしさ。
かわいいこすさで

重ねる數々のいたずら、
しかも私たちは
その罪をほめもする。
おさらでもグラスでも
ものすごくこわそうとする、
どんな細かなものでも
にぎろうとする。
お盆の上からでも
テーブルの上からでも、
手のかけられるものは
とろうとする。
數々の沈默——少しのためらい。
お國を思う心のような深さ、
たれも教えもしない言葉で
たちまち始める利口な演說。
それが持つた思想の總ては、
推量によつてあかりを
つけられたにちがひない。
數々のまどろみ——
かわいい天使のような姿。
かつては私たちも
持つたことのある夢。
眠るとから眼ざめるまで
私たちはお前を見ている、
しかも私たちは、
いつも眼ざめている
お前のそばにいたのだ。
私たちには計りようもない財寶、
總ての樂しみの上の樂しみ、
喜びの上にあふれた喜び、
苦勞の中の喜び——
悲しみの中の樂しみ、
つきることのないかわいさ、
あらゆる甘さを超えた甘さ、
ありとあらゆる美しさを
ここに集めた美しさ——
それがメイ・ベネット、
それが私の赤ちやん。

これは「赤ちやんメイ」と題したウィリアム・コクス・ベネットの詩である。この詩を讀んで抗議をする母親も父親も、この世の中には一人としていないであろう。讀み流してしまえば、子供を持つている人は、母としても、父としても、當然のことのように思うかもしれない。あるいはもつと自分の感情は鋭いものであると自負する人があるかもしれない。しかしながら子に對する親としての感覺を、このように纖細にとらえた作は少いであろう。一語一語を味う中に、私たちは數限りない歡

喜を感ずる。

私はこの詩を「ワン・サウザンド・ポエムズ・フォア・チルドレン」という本から見つけたのではあるが、作者がウィリアム・コクス・ベネットの人となりについて、私のとぼしい參考書では、調べようがなかつた。しかしその作風から見ると、十八世紀末のアメリカの詩人ではないかと思う。

その時代の有名な詩人の一人に、ヘンリ・ウォズウォース・ロングフェローがいる。彼の詩はあまりに平明であるために、思想を缺くと評價されているが、必ずしも詩人に、深刻な人生の題材ばかりを期待することは、味う人のわがままではないかと思う。平明な中にもつきぬ味を感ずるのは、味う人の努力であると云われぬことはない。彼はハーバード大學の語學の教授をしていたが、度々歐洲へ渡つて、諸國の民謡をアメリカに紹介した。他界したのは千八百八十二年のことで、七十五歳であつた。

彼が描いた子供の詩に「子供たちの時間」というのがある。

子ども達の時間（ロングフエロー）

暗がりと晝間の境、
夜のとばりが
下り始めようとする時、
その日の私の占領の中に
一やすみが來る。
それは子供たちの時間だ。
私は私の頭の上の部屋で、
バタバタと小さな足音が
するのを聞く。
ドアの開く音、
それから柔かな甘い話し聲。

私は仕事をやめて
ランプのあかりで見る。
ホールの廣い階段を下りてくる
落ちついたアリスを、
笑つているアレグラを、
それから金髪のエディスを。

ささやきの聲、やがて沈默、
それでも私には
彼等の樂しそうな眼でわかる。
彼等は私を驚かそうと
たくらんでいるのだ。
階段から突然の突進、

ホールからの突然の侵入。
番人もいない三つのドアから、
彼等が私の城壁へ。

彼等は私の砲塔によじのぼる。
私のチェアの腕や脊を超えて。
私が逃げようとすれば、
彼等は私を包圍する、
彼等はどこにでもいるのだ。

彼等は私をキッス攻めにして、
その腕は私にまつわる。
私はライン河畔の
ねずみの塔の中にいたという
ビンゲンのビショップのことを
思ひ出す。

ああ、青い眼の山賊共よ、
だつてお前たちは
城壁によじ登つたのだもの、
お前たちは私のような老兵は、
お前たちにはかなわないと
思うのかしら。

私はお前たちをしつかりと私の城の中に閉ぢこめて
外へ出さないようにする。
そして私の心が
圓塔の中にある獄舍に
お前たちを入れてしまう。

私は永遠にお前たちを
そこに閉じこめておく。
そうだ、永遠にそして一日中、
城壁が崩れ落ちて
粉々になるまで。

この詩を讀まれる方は、思わずほほ笑まれるであろう。自ら言う老兵にふさわしく、顏中ひげだらけのロングフェローの寫眞を見たことのある人はもち論のこと、見たことのない人でも、ありありと彼の姿を思ひ浮べるであろう。愛兒たちと必死になつて、抱き合つた姿を。なんというほほ笑ましい風景、そしてまたなんという嚴肅な風景であろう。彼の傳記を見ると、彼は不幸にも二度も愛妻に先き立たれたことが記されている。そのことを思ひ合わせると、愛兒たちへの思慕は、私たちの想像にあまるものがあつたにちがひない。

（つづく）